

## 紙の新聞を大切に : 京・江戸・博多、そして巴里 : 27

南野, 森  
九州大学大学院法学研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/7344020>

---

出版情報 : 福音宣教. 78 (5), pp.12-13, 2024-05-01. オリエンス宗教研究所  
バージョン :  
権利関係 :





2024年3月25日の九州大学法学部卒業式。この学年は、コロナ禍により入学式がなくなり一斉オンライン授業から始まった学年（本連載第2回「知と出会い、人と出会う大学」参照）であるだけに、感慨もひとしおでした。



## 京・江戸・博多、そして巴里

南野 森●憲法学者

### 27 紙の新聞を大切に

卒業式が終わると新学期である。九大法学部の学務委員長という役職にある私は、毎年「新入生ガイダンス」で大学生活や学業を進めるうえでの留意事項をあれこれ話すことになっている。1年生向けの「法学入門」の講義も担当するので、「目をキラキラ輝かせた新入生が大教室に溢れ、私の話をひと言も聞き漏らすまいと言わんばかりの熱心さで受講してくれる」（本連載第14回「教師のやる気、学生のやる気」）恵まれた空間に改めて身を置くことにもなる。

そんな私がいつも新入生に向かって言うことがある。「大学生になったら紙の新聞を取りなさい」、である。

私が子どもの頃は、だいたいの家庭でも紙の新聞を取っていた。しかし時代は変わり、私が4年前に実施した法学入門受講者のアンケートでは、回答者224人のうち88人（39%）が実家で新聞を取っていないかった。日本新聞協会の集計によれば、2023年の新聞発行部数は2900万部で、2003年の5300万部から20年で半分近く減っている。紙の新聞を読む人は少なくなった。

スマホでネットを使いこなす若い世代は特にそうで、彼ら彼女らに紙の新聞を読みなさいなどと言うと、何を時代錯誤なことをと呆れられてしまいそうである。ニュースならネットで見ているから大丈夫、と。

しかし、ネットに流れる情報は玉石混淆で、どこの誰が書いたかわからないフェイクニュースや陰謀論、あるいは根拠薄弱なものであることも多く、それを読者が見分けるのは容易ではない。同じ媒体でネットニュースを見ていると、読

者の興味に合わせて人工知能が記事を選ぶようになり、結果的に偏ったテーマや論調の記事ばかりを読むことになる。忙しかったりするとわざわざアクセスするのが面倒になり、そのうちニュースをほとんど読まなくなってしまう。

紙の新聞は、もちろん誤報や偏りが全く無いとは言えないものの、それでも専門の訓練を受けた記者がきちんと調べて記事を書き、同僚や上司のチェックを受けてから紙面に掲載される。一般紙であれば、社会面、政治面、経済面、国際面、文化面、家庭面、読書面、オピニオン面……と多様な分野のニュースや解説記事が掲載され、それがまとまって毎日手元に届く。何かとコスト・パフォーマンスが重視される昨今の風潮はどうかと思うが、しかしこれほど「コスト」の良い知識の源もそうはあるまいと思う。お金を払って購読すると、ページをめくりもせず古紙回収に出すのはもったいない気持ちになり、あえて時間を取って読もうという気にもなるだろう。学生には、とりわけ法学・政治学という社会に直結する学問を学ぶ学生には、紙の新聞を取ってほしいと思うゆえである。

時代の大きな流れに抗うのは難しいが、私の同僚には、紙の新聞購読をやめてデジタル版の有料会員になったものの、数年を経て、やはりデジタルだとちゃんと読まなくなると言って紙の新聞の購読を再開した人もいる。ネット書店さえあればリアル書店がなくなっても良いかというと、本棚を実際に眺めることで本との偶然の出会いがあるように、なんでもデジタルで代替できると勘違いしてしまう「デジタル化の罠」には、注意したいものである。



みなみの・しげる●九州大学法学部教授。京都市生まれ。洛星中・高等学校、東京大学卒業後、同大学大学院、パリ第10大学大学院を経て、2002年九州大学助教授、14年教授。AKB48の山内奈月との共著で好評を博した『憲法主義』（PHP文庫）ほか著書多数。